

2025年度早稲田大学史学会大会ご案内

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。このたび、下記のとおり
2025年度早稲田大学史学会大会を開催いたしますので、ご案内申し上げます。今
年度は全大会及び日本史部会は対面、その他部会報告はハイブリット形式にて開
催いたします。なにとぞご出席・ご参加くださいますよう宜しくお願い申し上げま
す。敬具

早稲田大学 史学会
会長 谷口 眞子

日時 10月4日(土)午前10時より

会場 早稲田大学戸山キャンパス/Zoom

オンライン参加方法(東洋史・西洋史・考古学部会のみ)

<https://forms.gle/Hg55h1HQbDJrPRQp6> より参加登録をお願いいたします。

右記QRコードを読み取っていただいても、申請フォームに記入できます。

追ってID及びパスワードをお知らせいたします。



◎研究発表(10:00~12:30) ※日本史コースは対面のみ

日本史部会 33号館 3階 第1会議室(対面のみ)

- | | |
|--|--------------|
| ① 摂関期の「良吏」 | 大学院学生 森田 大貴 |
| ② 取次からみる沼田城代河田長親の再検討 | 大学院学生 小林 真悟 |
| ③ 第一次地方分権改革期における広域行政のあり方からみた特別区の「一体性」
一臨海部広域斎場組合の設立過程を中心に | 大学院学生 五十嵐 慧祐 |
| ④ 近世初期におけるフランシスコ会布教 | 大学院学生 井上 果純 |

東洋史部会 33号館 6階 第11会議室(ハイブリッド)

- | | |
|--|------------|
| ① 金朝初期における護衛任命の実態とその政治的意義—人物分析に基づく一試論— | 大学院学生 王 乾安 |
| ② 「懸泉漢簡(肆)」における術数竹簡 | 訪問学者 陳 怡彬 |

西洋史部会 33号館 16階 第10会議室(ハイブリッド)

- | | |
|--------------------------------------|-------------|
| ① 1619年プラハ全国議会における連合形成—連合規約と草稿の比較から— | 大学院学生 佐藤 健人 |
| ② リバプール奴隷貿易商ジョン・タールトンの資本形成の軌跡 | 大学院学生 栗原 宏 |

考古学部会 39号館 5階 第5会議室(ハイブリッド)

- | | |
|-----------------------------------|-------------|
| ① 古代エジプトにおけるミニチュア土器群の規格と製作技術について | 大学院学生 淡田 陽子 |
| ② 三次元計測を用いた上毛野地域の横穴式石室築造技術についての分析 | 大学院学生 有水 祥真 |
| ③ GISを用いた古墳時代社会の地域構造の研究 | 大学院学生 梶原 悠渡 |

◎総会(13:30~14:00) 33号館3階 第1会議室(対面のみ)

◎全体会:新任教員による講演(14:10~18:00) 33号館3階 第1会議室(対面のみ) 詳細は下記

◎懇親会(18:30~)

場所: 戸山生協食堂 会費: 4000円(院生3000円、学部生2000円)

懇親会に参加ご希望の方は、9月17日(水)までに、先のリンクもしくはQRコードにあります申請フォームから懇親会参加登録していただくか、shigakukai.waseda@gmail.com までお知らせいただきますと幸いです。

早稲田大学史学会 公開講演会

場所：戸山キャンパス 33 号館 3 階 第 1 会議室

会長挨拶・趣旨説明：谷口 眞子

14 : 10 ～ 14 : 20

講演：

1. 植田 喜兵成智（東洋史）

14 : 20 ～ 15 : 30

「新羅の『三国統一』と東アジア」

本発表は、新羅による「三国統一」の東アジア史上の歴史的意義を論じるものである。7 世紀、朝鮮半島の王朝の一つである新羅は大きな変化に直面した。高句麗、百済との争いが激化し、唐（中国）や倭（日本）が軍事的に介入するようになったことで、朝鮮半島の戦乱は東アジア規模の争いとなっていた。そうしたなかで新羅は、唐と協力関係を築き、660 年に百済を、668 年に高句麗を滅ぼした。最終的には唐の勢力も朝鮮半島から放逐して「三国統一」を成し遂げたとされる。しかし、新羅の「三国統一」の歴史的意義は、長らく適切に評価されてきたとは言いがたかった。その理由はいくつかある。新羅の「三国統一」を最終的に決定付けた羅唐戦争の経緯が史料上の限界から不明瞭であったことや、当時の東アジア情勢との関連性が十分に明らかにされていなかったことなどによる。そこで本発表では、近年、注目されている出土史料の唐代墓誌を活用しながら、新羅の「三国統一」の過程を詳細に検討していく。加えて、百済・高句麗遺民の動向を詳細に明らかにすることで、新羅の「三国統一」が朝鮮史だけの問題ではなく、東アジア史上にもおいても重要な事件であったことを明らかにする。

2. 中門 亮太（考古学）

15 : 30 ～ 16 : 40

「縄文時代研究と民族誌」

民族考古学は、プロセス考古学におけるミドルレンジセオリーの一手法として、世界各地の民族事例や民族誌を参考に、考古資料から当時の社会を探るための研究方法として確立してきた。考古資料のうち、土器は遺存性が高く、時代・地域を問わず普遍的であり、可塑性・可変性に富むという特徴を持つことから、時期差や地域差を捉えるための相対編年の指標として重要な役割を担ってきた。土器の時期差や地域差の背景には、同一の系統に属する集団や、製作伝統・技術を共有する製作者のつながりなどを想定することが一般的であるが、その実態について考古資料のみから探ることは非常に困難を極める。そこで有効となるのが、土器づくりが現存する地域を対象とした民族考古学的研究である。民族調査の強みは、現地の土器について製作者や所有者に聞き取り調査を行うことで、その実態を詳細に把握できることにある。現地で我々考古学者が認識できる土器型式（つまり、考古資料から組み立てられる土器型式）について、その社会的背景を探ることができ、土器型式が意味するものを理解する上で、非常に有効であると言える。本発表では、発表者がこれまで取り組んできたパプアニューギニアにおける土器づくり民族誌調査と、その成果から縄文土器型式をどのように解釈することができるのかについて紹介する。

3. 貝原 伴寛（西洋史）

16 : 50 ～ 18 : 00

「猫から始める感情史」

本年度から西洋史コースでフランス史を担当しています。私は 18 世紀フランスの社会と文化を、主に出版文化を手がかりに研究しています。パリの社会科学高等研究院（EHESS）に提出した博士論文では、1727 年に出版された『猫』という本との出会いをきっかけに、猫を愛玩動物として愛でる態度が社会に広まる過程をたどる研究を行いました。その内容は、昨年秋に名古屋大学出版会から刊行した著作『猫を愛でる近代：啓蒙時代のペットとメディア』にまとめています。本報告では、拙著の内容を簡単に紹介しつつ、近年の歴史学で盛んに議論される「感情史」という研究領域に関して、いくつかの考察も提示したいと思います。とりわけ、既にフランスのアナール派の歴史家たちが開拓してきた「心性史」や「感性史」との関係について、私見を述べるつもりです。加えて、猫という動物を歴史学の研究対象に据えることがどうして可能になったのかについても、18 世紀フランスの研究史だけでなく、「アニマル・スタディーズ」と呼ばれる研究潮流に紐づけて説明してみたいと考えています。要するに、私自身の研究の具体的な内容の紹介はそこそこに、史学史的な議論に重点を置いて、皆さんと一緒に歴史学の方法一般について考える手がかりとしたい、というのが私の目論見です。こんな欲張りをして、果たしてうまくいくかどうか、乞うご期待。